



「半分の月がのぼる空」
二次創作



初恋スノードロップ

Snowdrop drops now.

文風 冴月

ことをそういう。

天使！——やれ、やれ！ だれでも自分の恋する女の

ゲーテ 『若きウェルテルの悩み』

山西はバカな男だ。

いや、男はみなバカな連中だと言ってしまえばそれまでだし、僕だってバカな部類には入るわけだ。

ただ、山西は僕の知っている中でも特にバカな男だった。

そんな山西に彼女ができたらしい、という噂は聞いていた。前にもこんなことあったなあ、と妙な既視感に襲われていた僕だったが、直接本人からノロケ話を聞かされたときには、思わずみぞおちに一発食らわせてやるほどだった。

「なんだよ、戎崎、お前には里香ちゃんがいるんだから、いいだろ……なにも殴ることないじゃないか」

呼吸を整えながらそう言う山西を軽く流した。

しかし、山西に彼女か……。

以前の彼女にはひどい振られ方をしたばかりなのに、懲りない男だ。

山西の彼女、藤田美晴さんというらしいけれど、本人曰くものすごく可愛いそうだ。

それは誰だってそうだろう。僕だって里香のことは世界で一番可愛いと思っているのだから。

「いやあもう初めて会った瞬間に、こう、わかっちゃうんだろうな……なあ、戎崎もそうだったか？ なに、わからない？ なんてやつだ。体に電撃が走るって、よく言うだろう？ まさにそんな感じだったわけよ」

あまり山西のデレデレした気持ち悪い顔を見たくなかった僕は、

「で、話ってそれだけか？ わざわざお前のノロケ話なんか聞きたくはないんだけど」

そう言うと、山西はやっと思いついたかのように、手をポンとひとつ打った。

「そうだった、そうだった。お前に頼みたいことがあったんだ」

ようやく本題か、とノロケ話が終わったことに安堵したのも束の間、やつの口からはとんでもない言葉が飛び出したのだった。

「頼む、戎崎……どうにかして、雪を降らせてくれ！」

僕はその時、改めて思ったのだ。

——山西はバカな男だ、と。

年が明けて、長くもない冬休みが終わり、学校生活が始まった。冬休みに入る前、ちょうどそれもクリスマスの少し前だ。山西の彼女の噂を聞いたのは。

直接本人から聞いたのがつい昨日の出来事で、一月も半ばとなり、山西たち三年生は残り少な

い高校生活を謳歌しているところだった。

「裕一は、その美晴さんみたいな目が大きくて髪の毛もふわふわウェーブがかかっている小動物っぽくて甘えん坊な女の子がいいってわけね」

里香が怒気を孕んだ声で、一息にそう言った。

「いや、オレはそんなこと言ってないって！」

「どーだか……」

じーっと、半信半疑の視線を送られる。

昼休み、里香と一緒に弁当を食べるのは恒例となっていたが、山西のことを話題にしたのはまずかったみたいだ。冬の寒さを何倍にも厳しくしたような里香の視線が、僕を射抜く。

美晴さんについての山西の話しぶりは、暑苦しいほどに熱がこもっていて、聞いているこっちが恥ずかしくなるほどだった。その甲斐あってか、説明だけ聞けば、超絶美少女である。

「まあ、いいけど」

ちっともよくなさそうな顔で言って、里香は小さな弁当箱をつつく。

「それで、どうするのよ」

小さくカットされた卵焼きを、薄水色の箸で更に半分に切り分けて、可愛らしい唇まで里香が運ぶのを、ぼーっと見ていた僕は我に返る。

「ど、どうするって、何が」

「雪」

ああ。そうか。山西が僕に頼んだことを思い出す。

「雪を降らせるだなんて、オレたちがどうこうできるもんじゃないだろ？ あいつって、本当にバカだよなあ」

「でも、頼まれたんでしょう？」

「もちろん、断ったよ」

山西の願いは、叶えてやることができない。僕たちの住んでいる伊勢は、あまり雪が降らないのだ。新年を迎えてから、真冬の寒さが厳しくはなっているけれど。

「だって、雪だぜ？ 頼まれてホイホイ降らせることができたなら、それこそすごいだろ？」

「裕一の秘めたる力が覚醒するわけだ」

「何も秘めてないって」

里香が、花がほころぶように笑った。とても可愛い。

山西もこんな感じなのだろう。彼女ができたというだけで、有頂天になるのもうなずける。

「でも、山西くん。なんで雪なんて降らせてくれ、なんてお願いしたんだろうね」

言われてみれば不思議だ。

雪なんて降ったって寒いだけだ。外で遊びたいような歳でもないし。

何か理由があるのだろうか。

もしかして、美晴さんに頼まれたのだろうか。

「雪が見たいの！ 今すぐ！ さっさと降らせなさい！」

だめだ。今、聞いたこともない美晴さんの声を、反射的に里香の声で脳内再生していた。

恐る恐る里香を見やると、食べ終わった弁当箱を片づけているところだった。よかった。

雪を降らせろ、だなんて理不尽な願いをするような女の子が、周りにたくさんいるだなんて、認めたくない。

「どうしたの、裕一？」

「あ、いや」

「なにか失礼なこと、考えてたでしょ」

「か、考えてないって！」

里香の可愛い頬がぷくっと膨らんでいる。

そう答えながら、山西と会ったときのことを思い出す。

実は山西に頼まれたことはもうひとつあった。

雪を降らせてくれ、に比べれば僕にできないことではなかったのだけれど、気は進まなかった。

というのも、

「エロ本を引き取ってくれ！」

山西はそう言ったのであった。

いい加減、山西の突拍子もない発言に慣れてきている僕でも、思わず脱力してしまった。それほどまでに、山西は真剣に僕に頼み込んできたのだ。それはもう呆れるほどに。

「前の彼女にフラれてからさ、傷心を癒すためについつい買いこんじたんだよ……美晴さんにばれたらどうなることかわからない……だからさ、お願いだよ戎崎！」

「なんでオレがお前のエロ本を貰わなくちゃならないんだよ！ そんなもん捨てちまえ！」

「な！ 戎崎、それでもお前は男か？ あれほどまでに男のロマンが凝縮された聖典とも言うべき本たちを、燃やせだと！」

「オレは前に全部燃やしたんだよ！ お前も同じ目に合わせてやる！」

「やめてくれ、やめてくれー！」

山西とギャーギャー騒ぎながら、結局僕はヤツの家まで来てしまった。

ひとつ言い訳させて欲しい。捨ててしまう辛さを、僕は知っている。いや、別にどうせ捨ててしまうのだから、最後にもう一度、本としての役割を果たさせてやるべきはないか、などと考えていたことは認めよう。

彼らもこの世に生を受けて、山西というバカな男のエゴで燃やされてしまうのに耐えられるだろうか。

否、それだけではあまりにも不憫だ。せめて、最後に一花咲かせてやろうではないか！

「結局、お前も見ただけなんだろう？」

部屋の押し入れから大量のエロ本を抱えてきた山西はそう言った。

「だから、違うって！ 捨ててしまうのがもったいな……じゃなくて、本がかわいそうだからに、決まってるだろ！」

興味本位だ。後学のためだ。多田コレクションの再来だ！ などと僕の心の中は穏やかではなかった。

それから、僕と山西はエロ本たちの弔いをした。それはもうとことんした。これであいつらも、燃やされたって悔いはないだろう。

「こ、これは……！」

思わず唸る。

「ど、どうして絆創膏なんか……！」

「誰も思いつかねえよな、こんなこと……変態だぜ」

山西も同じように唸る。たっぴりと堪能したはずの山西でさえ唸るほどなのだ。

上半身が裸の女の子が載っていた。けれど、大事なところは隠されている。それも、絆創膏によって。

「いいよなあ、戎崎は……里香ちゃんにはもうやってもらってるんだろ、こんなの」

「んなわけないだろ！」

ひとつ断っておくが、こんな変態のやるようなことを、里香にやらせているわけなどない。

しかし。

しかしである。

里香が絆創膏で、その、慎ましい双丘の頂上を覆い隠している姿を想像してみる。

何を馬鹿なことを。頭の中のどこか冷静な部分がそう呟く。里香がそんな姿を嫌がらずにしてくれるわけじゃないか。

「ねえ、裕一」

「うわあ！」

「どうしたのよ」

「いや、何でもないよ」

そう。この目の前にいる里香がである。

でも、もし。万が一、いや、億が一にでもしてくれでもしたら。

華奢な肩は里香の真っ黒な髪に少し隠れ、触ったら折れてしまいそうなほど白い鎖骨のその下。ふたつの丘陵を登り切った先に、絆創膏というささやかな庇護のもとにおかれた里香の大切な聖域とも呼ぶべき――

「裕一」

「うわあ！」

「だから、どうしたのよ、さっきから。私の話、聞いてた？」

「き、聞いてたよ」

「変なの」

そうやって里香はにこにここと笑う。

妄想を広げていた自分がバカになるくらい、その笑顔は可愛くて。

そしてやっぱり、男ってバカなんだよなあ、とひとりごちるのであった。

里香が退院して、僕と同じ高校に進めるようになって、一年が経とうとしている。今でも、月に一度のペースで定期検診のために、通院しなくてはいけない。

一月も終わりにさしかかっていた。

肌寒さはいっそう厳しくなり、山西の願いごとにも叶うのではないかと思われた。

「お待たせ」

検診を終えた里香が、僕のもとまでやって来てそう言った。

病院についてくるたびに思う。一年前と、僕は何か変わったのだろうか。

里香と二人、歩きながら考える。

里香は、変わった。病院にいたころよりも、たくさん笑うようになったし、周りに友達もできた。

変わっていないのは、僕だけなのかもしれない。

あの山西でさえ――。

「え、戎崎……と、里香ちゃん……」

噂をすれば影である。エレベーターの前に山西がいた。

その隣には、肩まで伸びた髪の毛をゆるくウェーブで整えた女の子が寄り添うように立っている。薄い桃色のカーディガンに、紺のロングスカート。白い鳥のような絵が、スカートの裾に、小さくあしらわれているのが可愛いらしい。

きっと、この女の子が美晴さんだろう。

「知り合い？」

美晴さん（仮）が山西に尋ねる。話を聞いた感じだと背が小さいイメージがあったけれど、山西とあまり変わらない。

「あ、うん、そうなんだ。学校の……」

歯切れの悪い山西の背後で、エレベーターの扉が開いた。

「さ、先行ってていいから！」

山西はそう言いながら、慌てて美晴さん（仮）をエレベーターに押し込んだ。けれど美晴さん（仮）は、

「ううん、保くんが先に行ってあげてよ。そのほうが、千明も喜ぶから」

どこか寂しそうな声でそう言った。

僕に謝るように軽く頭を下げて、山西はエレベーターに乗り込んだ。扉が閉まる。

後に残されたのは、里香と僕と、それから美晴さん（仮）だ。

「あなたが、山西くんの……」

そう尋ねる里香に、彼女はひとつ頷いて、

「はい、保くんとお付き合いしています」

そう言った。

「あいつ、どこに行ったんですか」

先ほどの美晴さんの言い方から察するに、誰かの病室だろう。そこまで訊くべきではない、とは思うけれど、彼女がここに残っているのには、それなりの理由がある気がしたのだ。

「実は、私の妹……千明というのですが――」

美晴さんには歳の離れた妹がいるそうだ。名前は千明ちゃん。

千明ちゃんは幼い頃から喘息持ちで、入退院を繰り返しているらしい。

病室の前まで美晴さんに案内されて、僕と里香はこっそりと中を覗きこんだ。

そこには山西と、小学生くらいの女の子、千明ちゃんがいた。桃色のパジャマの上にベージュのカーディガンを羽織っている。小柄なのはあまり学校に通えていないからかも知れなかった。

山西はその千明ちゃんにいろいろと話しかけている。千明ちゃんもなんだか楽しそうで、まるで兄妹みたいに見えた。

「保くんね、こうしていつも千明の話し相手になってくれているの。病院は退屈だろうって」

にこにこ美晴さんは語った。

少しだけ山西のことを見直した瞬間だった。どんな人間にだっていいところはあるものだけど、山西にもちゃんとあったわけだ。

病室を覗いていた僕たちに、千明ちゃんが気づいた。山西はまたしても、牛に踏まれたカエルのような声を出して、こちらを睨んだ。

「保さんのお友達ですか？」

千明ちゃんのくりくりした瞳が、僕と里香、それから山西を代わる代わる眺める。

「そうだよ。私は秋庭里香。よろしくね」

そう言いながら里香は病室の中へと入っていく。なんだか不思議な感じがした。

私服の里香が、病室に入っていく。一年前はこんな光景を、想像することすらできなかっただろう。

変わったんだな、とつくづく思う。

「綺麗な花だね」

里香は細い指で、ベッドの脇に置かれた花瓶を差した。白い花が二輪ささっている。小さくて可愛らしい花だ。

「スノードロップというんです。お母さんに頼んで買ってきて貰ったの」

「へえ、これがスノードロップ」

里香が一息つくと、

「いつもそうやってわがままばかり言うんだから」

僕らの後ろから、すかさず美晴さんが言った。けれど、そこには嫌味ったらしさなんかなくて、からかっているだけだとわかる。

千明ちゃんも別にそれに腹を立てたりはしなかった。

姉妹というのはこういうものなのかな、と一人っ子の僕はぼんやりとそんなことを思う。

「この間だって、保くにわがまま言っていたじゃない。雪を降らせて一、だなんて」

その言葉を聞いた山西はびくっと体を震わせて僕を見た。雪を降らせて欲しいと言っていたのは千明ちゃんだったのか。そうするとあのときの山西の必死さもわかる気がする。

僕だって里香に無理難題を言いつけられもしたけれど、なんとか彼女の機嫌を損ねないように頑張ったものだ。里香とのちがいは、千明ちゃんがそこまで傲慢そうに見えないところだけだ。

「えー、だって雪で遊びたいんだもん……」

あまり学校に通えてない千明ちゃんにとって、友達と雪の中で遊ぶことすらままならなかったのだろう。そう考えると、なんとかして叶えてあげたい気にもなる。

そう思って山西を見ると、ヤツは黙って窓の外空を見上げていた。空には分厚い雲が覆いかぶさっていた。雪は、降りそうになかった。

「雪なんてそう簡単には降らないよ。それにもしも雪が降って、また体調を崩したらどうするのよ」

「うう……」

肩にかかる髪が、元気なく揺れる。もしかしたら、本当に雪が降るのを待っているのだろうか。

「ああ！ オレ、急用思い出しちゃったなー！ 戒崎、ほら、すぐ帰らないと！」

唐突に山西はそう叫び、僕の手を取った。ぐいぐい引っ張られて、僕は思わず転びそうになった。

悲しそうな目で、千明ちゃんが山西を見つめる。

「保さん、帰っちゃうの……？」

「っ……」

山西は黙ったままだ。僕の手をぎゅうっと握ったままだもあって、なんだかひどく気持ち悪い。

「おい、山に――」

「保くんはこの後、用事があるんだって。だから今日はもう、さよならよ」

美晴さんがそう言うと、千明ちゃんは俯いて、しぶしぶ頷いた。

「じゃ、じゃあ、また来るから！ ごめんね、千明ちゃん！ それじゃ！」

と勢いよく僕の体を引っ張り、病室の外へと二人で転がり出た。後ろから里香がついてくる気配がした。

なんだか、よくわからないことになってきた。

それから山西は元気がなく、一言も発さないまま、三人で病院をあとにした。

なんとなく声をかけづらくて、僕も里香も黙っているしかなかった。三人分の足音が、ひんやりとした空気に溶けていく。

すると突然、

「あの花……」

里香が口を開いた。千明ちゃんの病室にあった白い花のことだろうか。

「スノードロップはね、日本語では『待雪草』というの……千明ちゃんは、本当に雪が降るのを願っているんだと思う」

山西は押し黙った。歩くのもやめてしまった。

「じゃあ、さ」

掠れ声で、山西は呟く。

「じゃあ、どうすれば、いいのかな……雪なんて、そんな簡単に降らないよ……でも、でもさ、オレ……」

約束したんだ。

山西は、それきり黙った。

どうにもできない。

それがわかってしまうからこそ、僕たちは苦しいんだ。

子供のときはそうじゃなかった。やりたいことや、願い事が突拍子もないことでも、いつかは叶うんじゃないかって、それこそ子供らしい空想ができた。けれど、高校生の僕たちには、それができない。

いつからこうなってしまったのだろう。

川の水が、海まで流れていく過程で、だんだん汚れていってしまうみたいに。僕らは汚れながら成長していくしかないのだ。

朝から雨が降っていた。

病院で山西たちと会ってから一週間ほど経っていたある日のことだ。夜から小雨が降り続いていたらしく、気温がぐっと下がっている。

家を出ると吐く息は真っ白になって、寒々しい空気に溶けていった。

少しだけ千明ちゃんのことを頭にちらつく。山西も、感じ取っているだろうか。何かが起こりそうな気配を。空は灰色の雲に覆われていて、いつ雪が降ってきてもおかしくはなかったのだ。

昼休み、その予感に驚くほど見事に的中した。

初めに誰かが呟いたのかはわからないけれど、確かに聞こえたのだ。

「雪……！」

里香と一緒に弁当を食べ終えたあたりで、そんな声が聞こえて、周りのみんなも一斉に窓の外を見た。そこには白く小さな雪が舞ってきているところだった。

「おお！」

とまた誰かが歓声を上げる。窓が開けられて、凍てつくような空気が教室に入ってくる。

「雪、本当に降ったね」

里香は信じられないといった顔で空を見上げた。席が窓際に近かったおかげで、僕らも雪の降る光景をよく見ることができた。

もうすぐ昼休みも終わりだというのに、校舎の外に出ている連中も見える。

と、その中に見知った人影が見えた。

「裕一、あれって……」

「ああ……」

こそこそと逃げるように走っているのは、間違いなく山西だった。学校中の生徒が外を見ている中、あいつはばれていないとでも思っているのか。

「病院に行く、のかな」

そうだ。そうに決まっている。

雪が降ったから。

なぜか僕もその後を追わなくてはいけないような気になる。わざわざ学校を抜け出していくほど、山西には切実な何かがあるのだ。

「里香、オレさ……」

「裕一は授業をサボっていいような成績なの？」

返す言葉もないような里香の指摘に、思わず唖ってしまう。けれど、里香の顔は笑っていた。

「行くなら授業が始まる前に行くべきだよ」

病院に着くと、せっせと雪玉を転がしている山西を発見した。

「お、なんだ、戒崎も来たのか」

「なんだじゃないだろ。雪は降ってるけどさ、学校を抜け出すほどかよ」

山西は苦笑いして、病院の壁を見上げた。つられて僕も視線を上げると、三階の窓から千明ちゃんがこちらに手を振っているところだった。

「学校も大切だけどさ。いつまで雪が降っているかわからないし」

どうしてそこまで。

喉元まで出かかった言葉を呑み込んだ。以前似たような質問をされたのを思い出したからだ。

初めて里香と砲台山に行ったとき、言われた言葉。どうして私のためにそこまで、って。

理由は初めからあったのかも知れないし、後からくっついてきただけなのかも知れない。

「千明ちゃんが外に出るわけにはいかないってさ。だから、オレが雪だるま作ってきてあげるよ、って言ったんだ」

それでも、なんだか本当に呆れてしまった。授業をサボってまですることかよ、とか、お前ってほんとバカだよな、とか、山西に言いたいことはたくさんあったけど。

「手伝うよ」

僕は山西の隣にしゃがみこんだ。指に触れた雪は、ひんやりと冷たかった。やっぱり僕もバカなのだった。

舞い上がっていたのは山西だけではなかったのだ。僕も同じだ。

千明ちゃんの、雪が降って欲しい、という願いが本当に叶って、それは本当に奇跡みたいなことだけれど、それでもこうして現実に雪は降っている。

「よーし、戒崎より先に完成させるぞ！」

「一人ひとつかよ！ 二人でひとつ作ればいいだろ！」

そんな冗談を言いながら、僕らは笑いあった。病室の窓から、千明ちゃんがこちらを見ていて、頑張ろうという気持ちになった。

雪だるまが完成しようとしていた。そのときだった。山西が異変に気づいたのは。

作っているうちになんだか楽しくなってしまう、夢中になって雪玉を転がしていた僕に、山西は切羽詰まった声で、

「戒崎、やばい！ 千明ちゃんが！」

そう叫び、すぐさま走り出した。千明ちゃんが手を振っていた三階の病室を見上げると、窓は開けたままになっているが、そこには誰の姿もなかった。

いったいどうしたというのだろう。わけもわからずに僕も駆け出す。

思い返せば、さっきまでにここにことこちらを眺めていたではないか。寒くなったからベッドに入ったとか。いや、だったら窓も閉めてしまえばいい。

そもそも山西は何を見たというのか。

病院の入り口付近で山西の後ろ姿を発見した。

「おい、山西！ 何があったんだよ！」

大声で叫んだ。山西は僕に向かって、負けなくらい大きな声で叫んだ。

「千明ちゃんが倒れたんだよ！ オレがちょうど窓を見たときに！」

雪が降るくらいの気温だ。どれくらいの間、雪だるまを作っていたかはわからないけれど、それでもあの子は病人なのだ。体に影響が出ないわけがなかった。

「くそ！」

階段を二人で駆け上がりながら、山西は悪態をついた。

「なんでだよ、なんで、こんな……！」

山西の見間違いであればいい。そう思った。

けれど、現実は残酷だった。千明ちゃんは窓辺に倒れ込んでいた。呼吸が荒く、汗の浮いた頬に髪がへばりついていた。

最悪だ。

今朝から何かが起こるのではないか、という期待があった。しかしその胸のざわつきは、裏を返せば不安だったのではないか。何かが起こってしまうのではないか、という不安だ。

山西は僕の横でうつむき、病院の床をじっと見つめている。

千明ちゃんは高熱を出して、名前を呼んでも目を覚まさなかった。亜希子さんにはこっぴどく怒られた。

もうすぐ日も暮れるというのに、千明ちゃんは眠ったままだ。雪はどんどん降り積もっている。

「山西」

呼んでも返事がない。

「おい、山西！」

少し強めに呼びかける。それでも、山西は動かない。いや、動けないのかも知れなかった。

僕もこうだったのだろうか。

里香が手術室に入っていったときのことを思い出す。ただひたすら待たなければいけなかった、あの時間を思い出すと、お腹のそこに何か大きなものが落ち込むような、ひどく不安な気になるのだ。

「オレの、せいだ……」

ようやく山西が口を開いたかと思うと、それはそんな言葉で。

「オレが、雪だるまなんて作ってやるって、言ったからだ……」

気にするなよ。

山西のせいじゃないだろ。

そんな言葉が頭に浮かんでは、消えた。

無責任だ。そんな軽い言葉をかけてやれるはずがない。

たとえその言葉で山西の気持ちが救われたとしても、それは本当の救いではないからだ。

ふと、遠くから走ってくる足音が聞こえた。スリッパの音ではないから、看護師さんではないだろう。暗がりから現れたのは、なんと美晴さんだった。

「保くん……！ それに、戎崎くんも」

僕がいたことに驚いたのだろう。それもそうだ。僕は彼女にとっては赤の他人だ。

僕と山西を交互に見やっ、美晴さんは乱れた呼吸を正そうとした。走ってきたのだろう。肩や髪には雪がまばらについていたけれど、彼女はそれには気がついていないみたいだった。

「雪でバスが遅れちゃって……ごめんね、保くん」

山西はなんとも答えられなかった。僕も、言葉が出せない。美晴さんに連絡をしたのは看護師さんだった。千明ちゃんのお母さんにも連絡がいつているはずだけれど、大雪で到着が遅れているらしい。

「謝るのは、オレのほうだよ」

山西がようやく絞り出した言葉は、謝罪だった。

突然の山西の言葉に、それでも美晴さんには通じたいらしい。

「保くんが謝る必要なんかないわ。千明のわがままにつき合ってくれただけじゃない」

「でも……」

誰がいいとか、悪いとか、そういった問題ではないのだ。ただ、山西は自分で自分が許せないのだ。

「千明はね、昔から体が弱くて……」

山西はきっと知っているだろう。僕という部外者のために、話してくれるのかも知れない。

「まともに学校も通えていないの。ただね、それも精神的なものじゃないかって、お医者さんは言うの」

千明ちゃんは喘息だと聞いていたから意外だった。

「喘息もそうだけど、千明が退院してもすぐに病院に戻ってきてしまうのは、心の問題だと思う。何か嫌なことがあると、逃げ出すように、安全な病室に戻りたくなってしまうのね」

美晴さんは冷静にそう言った。それは千明ちゃんを侮蔑するわけでもなく、真摯に妹の姿を見つめた結果だった。

「でも、今回はオレが悪いんだ……千明ちゃんの願ってた雪が本当に降って、それで、舞い上がっちゃってさ……」

苦しそうに、山西は顔を上げた。

「お前は――」

僕の目をしっかりと見て、山西は不安げに問う。

「――こんなとき、どうしてたんだよ、戎崎」

僕は……。

ただ、待つしかなかった。

がむしゃらに願って。

ひたすらに、祈って。

「待つしか、ないよ」

掠れた声で、僕はそう言った。それしかできないんだ。

大人になるにつれて、なんでもできると思っていた。

けれど、大人になるにつれて、思いつくことや、できることの範囲が狭まっていく。狭めていくのは、他ならない自分自身だ。

「戎崎……」

それでも何かに縋るように山西は僕を見た。

千明ちゃんが目を覚ますのを、待つしかないんだ。そう言おうとした刹那。また足音が聞こえた。こつこつ、と。心臓が脈を打つみたいに。

僕らの前にやってきたのは里香だった。

「いつまでたっても帰ってこないと思ったら！」

開口一番、里香は僕に怒った。それから山西と美晴さんを見て、怒りを鎮めた。亜希子さんから事情は聞いているそうだ。

「千明ちゃんは、まだ……？」

沈黙が下りる。

「ごめんな、里香ちゃんまで心配させちゃって。全部、オレが悪いんだ……」

「保くん、もう気にしなくていいんだよ……」

「でも……！」

美晴さんが慰めても、山西はいっこうに聞かない。それだけ、山西にとってショックが大きかったのだろう。

「山西くん」

里香が、口を開いた。もう慰めの言葉なんていらぬ、といった顔で山西は里香の真っ黒な瞳を見つめる。

「千明ちゃんは、山西くんのこと責めたりしないよ」

「そんなの……！ わからないじゃないか……オレが雪だるまを作ってあげるって言ったんだ…
…千明ちゃんは、完成するまで見てるって言ってさ。せめてもっと温かい格好をさせてあげれば——」

「スノードロップが待雪草っていう名前でもあるって話、前にもしたよね？」

言葉を遮った里香の声に、山西の肩が一瞬、震えた。待雪草。千明ちゃんは心の底から雪が降るのを願っていたのだ。前に里香が言ったことだ。

「した、けれど……それが今、何だっていうんだよ……」

「あの時は言わなかったけれど、少し続きがあるの」

「続き……？」

うん、と里香はひとつ頷いて、語り出す。

「スノードロップの花言葉って、知ってる？」

山西は黙って、里香が口を開くのを待つ。

「スノードロップの花言葉はね、『希望』、『慰め』……それから……」

一瞬の間。少しためらって、美晴さんを見つめた。そして、言った。

「それからもうひとつが……『初恋のため息』」

初恋の、ため息――。

「里香、それって」

思わず声が漏れてしまう。千明ちゃんがスノードロップを病室に置いていた理由。それは待雪草という名の通り、雪を待っていただけではないってことなのか。

本当の理由は――。

「千明ちゃんがスノードロップをそばに置いておきたかったのは、雪を待っていたからだけじゃないんだよ……きっと、千明ちゃんは山西くんに会いたかったんだよ」

ひっ、と山西は息を漏らした。

美晴さんは何も言わずに、山西と里香を交互に見つめた。

「だからね、きっと嬉しかったんだと思うよ。願っていた雪が本当に降って、山西くんがその中を大急ぎでやってきて……奇跡みたいに思えたはずだよ」

山西はうなだれたまま、小さな声で、

「じゃあ、千明ちゃんはオレを許してくれるかな……？」

そう漏らした。無機質な病院の廊下に、切なく響いて、消えていく。

それでも、里香は優しく山西の頭を撫でた。

「当たり前だよ」

はっきりと、里香は告げる。

「女の子なら誰でも、好きな人のことなら許せるんだから」

ジグソーパズルみたいな雲が、空の青を隠していた。途切れた隙間から、真冬の太陽が思い出したかのように顔を覗かせる。少しだけ眩しくて、僕は目を細めた。

隣を歩く里香が、解け始めた雪をざくざくと踏む。

右、左と足を動かすのにつられて、黒く長い髪が揺れる。

「元気そうだったね、千明ちゃん」

あの日、千明ちゃんのお母さんが病院に到着してすぐに、彼女は目を覚ました。それでも、まだ熱が高い状態だったので、僕らは病室には入れて貰えず、亜希子さんに追い出されてしまった。

あれから二日経った土曜日。千明ちゃんの体調がよくなったということで、僕らはお見舞いに行った。今はその帰りである。

「それよりも今は、心配なのは美晴さんだよ」

力なく言う僕に、

「山西くんじゃなくて？」

くすりと里香が微笑む。

「あいつは別の意味で心配だけどなあ」

先ほどまでお邪魔していた病室での出来事を思い出す。

僕と里香が病室に着くと、中から楽しそうな笑い声が漏れているところだった。扉を少しだけ開けて中を覗きこむと、そこには千明ちゃんと山西がいた。とても仲がよさそうで、まるで兄と妹だった。

あら、と声が聞こえて振り向くと、美晴さんがいた。

「千明ちゃん、元気そうですね」

里香がにこにこした笑顔で告げる。美晴さんも頷く。

「そうね、熱もだいぶ下がったし、それに……」

そこで言葉を区切り、美晴さんは病室の中に視線をやった。

「保くんと話せるってだけで、あの子にはいいのかもね」

あれ、美晴さん、今日が笑っていなかったような……？ いや、そんな、まさか気のせいだろう。山西は美晴さんの彼氏なのだし、山西だってそのところを重々承知しているはずだ。

「な、仲よさそうですね……」

里香も敏感に何かを感じ取ったのか、声が震えている。

「ええ、本当に、仲がよさそうで、本当にね……」

三人でデバガメよろしく、山西と千明ちゃんを覗き見る。

ベッドの傍らに置かれたスノードロップが、窓から入りこむ風に、歌うように揺れている。

「まあでも、千明はまだ小学生だから。私に勝機はあるわ」

ぐっと拳を握りしめる美晴さん。いや、その前に小学生に手を出したら犯罪です。僕の周りには、なんでこう、気の強い女の人しかいないのだろうなあ、とも思った。それが二十分ほど前の出来事。太陽が少しずつ、積もった雪を解かしていく。

「ねえ」

数歩先を歩いていた里香が、くるっと振り返った。シャンプーの匂いがした。

「どうした？」

「裕一も、さ……」

視線を迷わせつつ、里香が言う。

「裕一もあんな気持ちだった？」

何のことだろう。

「千明ちゃんが目を覚ますのを、待っていたときのこと」

ああ。

「そのときはさ……その、つらかったよ」

なるべく言わないほうがいいだろう、とは思っていた。里香だって思い出したくはないはずだから。けれど、いつしか傷が癒えるのと同じように、つらかったことや、苦しかったことを話せる日が来るのだ。

「……そう」

里香はそれきり黙ってしまう。

ごめんね、とも、ありがとう、とも言えないで。いつもならそう言いそうなのに。

「里香——」

何か言わなくては、そう思って口を開いた瞬間だった。

首にひやりとした感覚があって、

「——うひゃあ！」

と盛大に大声で飛び上がってしまった。驚いて首元を触ると、雪の欠片が手についた。

「あははは」

それを見て、思わず吹き出す里香。

「裕一、雪が落ちてきたんだね。すごくびっくりしてたよ」

「笑いごとじゃないって、驚いたんだから」

目元に浮かんだ涙を拭って、里香はまだ笑う。

さっきまでの空気はどこかにいってしまった。でも、これでいいんだとも思う。

いつか——。

いつか笑い話にできたなら。

つらかったことも、苦しかったことも。

伝えたかったことも、伝えなかったことも。

全部、笑って話せたら、いいと思う。

「帰ろう、裕一」

僕の手をとって、里香が歩き出す。そうだ。僕らは歩き出さなくてはいけないんだ。

千明ちゃんのことを頭に浮かんだ。あの子は本当に山西のことが好きになったのだろうか。美晴さんは本当のところ、それをどう思っているのだろうか。それから、山西は……。いや、山西はきっと何も考えていないだろうからいいのだ。

どんな人にも、等しく幸せが訪れるとは思っていないけれど、それでも、あの三人のことはなんだかとても気になってしまうのであった。

千明ちゃんの恋は実るだろうか。きちんと学校に通えるようになるだろうか。

季節が変わるように、冬眠から覚めた命のように、彼女は変われるのだろうか。

それは、まだ誰にもわからない。

里香の手をぎゅっと握り返して、肩を並べて歩き出す。雪解けの道を、二人で歩いていく。

雪が解ければ、春がやってくる。全ての人に、等しく、確実に。

おわり